詩人の悔恨

——「悪の華」のボードレール——

岩切正一郎

1

1845年6月30日、ボードレールは24歳を少し越えていた。名高い南洋航海から、3年半前に帰還していた。10箇月前、準禁治産者の烙印を押された。1箇月半前、サロン批評を著述し、自ら出来映えに不満を感じ、手元の残部冊子を破棄処分した。黒い詩女神ジャンヌ・デュヴァルとの生活は始まっていた。そしてこの日、彼は自殺を企てたのであった。

翌年以後、友宜の袂を分かつことになる、ルイ・メナールは、「伝説にロマン的色合いを加えるための、見せかけ」の行為に過ぎず、折り畳みナイフで突っついたまでのことだと、伝える。

或るいは、「サロン評の失敗に関係するのか？出口のない人生を自覚したからか？財産補佐人を付けるという侮辱を加えた、全ての人へのあてつけなのか？」[1]

彼は負傷し、ジャンヌの母親の家に治癒の身を置く。数時間。あるいは数日。ボードレールは死ななかった。6日後には、バンヴィル宛に、詩篇入りの手紙を送っている。自殺は狂言だったのか、少なくとも、決行直前までは真剣に計画されたのか、誰にも判らない。我々には、この自殺が、明晰な意識の下に実行される行為なのだと語り、その理由を記す、詩人自らの書簡が残されている。

> (…)私は自害します——苦痛なしに。——私は、いわゆる苦痛という心の動揺を一かけらも感じていません。——私の負債は、一度も苦痛にはなりませんでした。こんなことを御すくらい、た易いことはありません。私が自害するのは、もう生きていられないからです。眠りにはいる時の疲れや、目覚める時の疲れが耐え難いからです。私が自害するのは、他の人に私が無益だからであり——私自信にとって危険でもあるからです。——私が自害するのは、自分を不死と思うからであり、希望があるからです。——これを書いている最中にも、私は非常なる明晰さに満ちており、テオドール・ド・バンヴィル氏のために、今も覚書を書いているし、自分の原稿に打ち込むための力も必要なだけあります。(…)[2](傍点原文)

語られる理由は、詩人に一生つきまとうものだ。ボードレールは、この理由を持ちだしてきて、それ以後も、いつでも自殺を企てて不思議はない。恐らくは、これ以前にも、同じ感情はくすぶっていたのかもしれない。彼自身強調していることであり、我々も注目するのだが、≪心の苦痛なく自害する≫という行為は、仮に、この企てが、人生の幕間狂言に過ぎなかったのだとしても、≪魂の不滅の確信と希望に支えられた≫、彼の人生の、主題となっているのではないだろうか。或るいはむしろ、≪後悔のない死≫として、詩作品中に繰り返される主題の、一変奏として、この書簡に滑り込んだのではなかったのだろうか。[3]

2

「悪の華」は、次のように始まる。

愚行、過ち、罪、しみったれ
ぼくらの精神を占め、肉体を苦しめる。
ぼくらは愛しい悔いをやしなう、
乞食がのみをふとらせるみたいに。

(読者へ)

悔いに≪愛しい≫という形容を施した時から、「悪の華」の性格は決定的だ。何故なら偉大な詩人も歌うように、「罪はめざめて悔恨を産み」[4]それは悪の王サタンから来て、この王に、死は起源をもつ。悔恨を愛しむとき、罪も愛しまれ、地獄への死が準備される。読者は、乞食と同列におかれ、こう指摘されることで、後ろ暗い快楽を覚える。幾分なりとも「悪のなかの意識」に目覚め、慰みもすれば、光栄にも感じることだろう。

もちろん、≪愛しい悔い≫は、原罪をひきずる我々の奥底を照らして、投げかけられた詩句であるばかりではない。それは、詩人にとっても、憂鬱や悲しみや不幸の花花を咲かせる、腐れた土壌であって、限りなく愛しいのだ。とすれば、悔恨は、愛しい対象として、「悪の華」の中で、讃歌を献じられることになるのだろうか。

ボードレールは、そうしなかった。むしろ彼は、この愛しい対象を、躍起になって絞め殺そうとするだろう。悔恨を忘却しようとし、≪悔いのない≫行為が、絶対的な価値を帯び、そこでの快楽が、至上のものになるだろう。悔いを嘆く時、或るいは、嘆くふりをする時、詩人が心からその没却を願っているのか、それとも、詠嘆自体を――従って悔恨そのものを――愛してしまっているのか、我々には判らない。だがともかく、ボードレールはこう問いかける。

生き、うごめき、身をよじる
　齢ふりたながい≪悔恨≫を
蛆が死体を、毛虫が樫をそうするように
　ぼくらを食べて肥る
なだめ難い≪悔恨≫を、絞め殺せるものでしょうか。

どんな媚薬、どんなワイン、どんな煎じ茶に
　この齢ふりた敵を沈めればいいのでしょう。
娼婦のように貪り破壊し
　蟻のように忍耐強いこいつ
どんな媚薬に？ ── どんなワインに？ ── どんな煎じ茶に？
(取り返しのつかぬもの)

ボードレールは、悔恨に苦しむ。この詩は、女優マリー・ドーブランにあてたものだが、快活なサバチエ夫人にあてた詩では、陰鬱な詩人の呼びかけはこうである。

陽気さあふれる天使、ご存じでしょうか悩みを
恥を、悔いを、すすり泣きを、憂鬱を
心をおさえて皺くちゃな紙きれみたいにする
おそろしい夜のぼうばくたる恐れを
陽気さあふれる天使、ご存じでしょうか悩みを
(功徳)

悔恨を殺すために、媚薬、ワイン、煎じ茶は、反語的ながら処方にあげられる。陽気さには、悔恨の扼殺は望まれていない。その理由はこうだ。詩人は陰鬱の美学を奉じており、愛しい悔恨を殺すのは、悪に列席する魅惑でなければ、満足しないのだ。陽気さは、悔恨が敵である以上に、敵なのであり、それに対しては、悩み、恥、悔い、等々を認知し理解することを望む。一般的には美徳ともいえよう、陽気さを廃して、ボードレールは、どのような手段を、悔いの抹殺に講じるのだろうか。

或る時期、彼は、崇高な美にその解決を求めた。その美は「泣きもしなければ笑いもしない」、その目は「永遠の光を宿す純粋な鏡」である。それは、人間の感情を超越している故に、悔恨の入り込む余地もない美だ。後年、ボードレールが自ら記す美の定義 ── 美は憂いや不幸と結びついている ── とする定義からは遠く離れるが、このパルナス風の美に、彼は苦痛からの解放を探ったのだった。

自殺未遂以前に書かれた、「寓意」という詩は、≪悔恨もなく≫死に面する女を歌っている。要約すると、この女も、崇高な美とおなじく、傷付くことのない大理石の肌

をしている。快楽に、回教徒風の信仰を捧げ、肉体の美こそ、崇高な天の賜物だと知っている。彼女は、地獄も煉獄も知らず、暗黒な夜にはいる時は、≪憎しみも悔いもなく≫嬰児のように死の面をみつめるだろう、という。この女は、≪愛しい悔恨≫を許すカトリック的世界観の外にいる。「寓意」とは、娼婦を暗喩していると、指摘されている。悔恨のない存在は、娼婦によって、理想化されたのである。

同じ頃書かれた、「善良な二人姉妹」は、詩人に、悔恨の訪れないベッドを提供する。

≪放蕩≫と≪死≫は、愛しいふたり娘
(•••)
不吉な詩人、家庭の敵
地獄の寵児、みいりの悪い太鼓持ちに
クマシデの木陰、墓と淫売宿はみせてくれる
一度も悔いが訪れたことのない寝台。

反社会的自負に貫かれた若年の詩人にとって、死と淫売は、悔恨のない世界の象徴として出現する。どうして、淫売に悔恨がないというのか。理由の一つは、娼婦が石女だからと彼はいう。種の保存や子孫の維持に無縁の、反自然的で純粋な快楽を与えるからだ。ずっと後にも、自由人と海を比較しながら、ボードレールはこう書くだろう。

その間にも数知れぬ世紀は過ぎてゆき
君らは憐みも悔いもなく闘う
こうまでも殺戮と死を愛してる
永遠の闘士、なだめ難い兄弟!
(人と海)

底知れぬ胸ふところで、人と海は殺戮と死を愛している。その闘争は、≪悔いがない≫ほどにも、倫理道徳を離れ、絶対的な価値をもつ。

3

十数年をかけて、一巻の韻文詩集のために作品を制作するボードレールにとって、死と淫蕩は、一貫して同一の価値を有していたのだろうか。

ぼくの暗くてきれいなひと、君が
黒大理石の玄室ふかく眠るとき

閨房や館といったら
雨ふる洞と空ろな墓穴でしかなく

怯える胸や、素敵にのんびり柔らかだった
脇腹も、石におさえられて
心臓には鼓動も欲もなく
足もいそいそと走れなくなったら

限りない夢の話し相手、墓は
(墓はいつだって詩人を解ってくれる)
眠りもいなくなった広い夜闇をこめ

君にいうだろう≪不完全な娼婦よ、亡者たちが
泣いて求めるものを知らなかったで、すむのかね?≫
――そして蛆は悔いのように君の肌を噛るのさ
(死後の悔恨)

詩人と墓には、理解者の密約がかわされる。詩人は死者の列にある。だが、先にみた理想化された娼婦は、ここにはいない。この詩が最初に発表されたのは、詩人34歳の時。だが作品そのものは、若年のものだという説もある。ここには、君と呼ばれるジャンヌとボードレールとの、実生活上の暗鬱な側面が影を落としている、30歳の詩人は、母にあてて手紙を書くだろう。かつてジャンヌには取り得があったのに。いまはそれを喪った。彼女は、善意も知的好奇心もなく、会話の相手になってくれず、自分の研究に理解を示してくれず、出版が儲けにならないなら、原稿だって火に投じかねないと。唯一の気晴らしだった猫をおっ払って、犬を連れ込んできたが、その理由というのも、自分は犬を見ると気持ちが悪くなるからなのだ。そういうことを書きながら、彼の目には、恥と怒りの涙が浮かんでいた。[5]

娼婦が完璧であるためには、死者の求めるもの、墓のむこう側で、永遠に喪失した取り返しのつかぬ貴重なものがあること、を知っており、詩人は暗くじめじめして出口のない空間にいて、夢によって言語でそれを創造しているのだと理解すること、それが必要なのだ。明らかに矛盾が生じる。理想の娼婦は悔いをもたないのに、完璧な娼婦は悔いを知らねばならないのだ。大理石の肌は夢幻のうちに崩れて、蛆が食べる娼婦は悔恨にねぶられるのだ。逆説的に、娼婦は完全になったのか?事態はそうなのである。ボードレールの美が、永遠のひかりを宿す瞳から、不幸や悲しみと結びついた愁いの美へ移行していくのと、軌を一にして、≪悔いでいっぱい≫であることが、意味深いことになるのだ。

こうして、娼婦は、悔いのない状態を、保証する存在ではなくなった。だが、ボードレールは、愛しい悔恨を亡ぼすために、ほかの可能性を探るだろう。
「忘却の河」に、我々は次のような一節を読む。

眠りたい！生きるよりも眠りたい！
死におとらず優しい眠りの中で
ぼくは悔いもなく愛撫するだろう
銅のようにつやつやしてきれいなその体。

悔いのない快楽は、眠りの中で行為される。その体を持つ≪君≫ジャンヌは、この詩では、香りの染みたスカートに詩人の頭を埋ずめ、死んだ愛の揺籃を呼吸させる。その口には力強い忘却が棲み、愛撫にはレテが流れている。そのとがった乳房の先端に、彼は忘れ草と毒人参、忘却と死を、吸うだろう、恨みを沈めるために。眠りの中でということは、回想の夢の中で、というに等しい。彼は、死んだ愛を愛撫する。「善良な二人姉妹」の時には、「いつ自分を埋葬してくれるのか」という、呼びかけで終わる詩人が、ここでは、暗い官能の中に、進んで死と忘却を求めにゆくのである。[6]

眠りは、悔いのない状態と結び付くものの一つだ。彼は、「殺人者のワイン」にこう書くだろう。

――やれやれ、俺は自由でひとり！
今夜はへべれけに酔いつぶれて
恐いことも悔やむこともあるもんか
地べたに横になって

眠ろう(…)

だが、眠りが一時的な忘却を約束するに過ぎないことは、明らかだ。「パリの夢」に展開される夢幻の光景を、詩人は目覚めによって破壊することを忘れはしない。
では、眠りを与えるワインはどうか。それは、「地獄落ちの女たち」の中で、「酒神よ、古い悔恨を眠らせる者！」と、呼びかけられる。また、我々は、「どんな媚薬、どんなワイン、どんな煎じ茶に」とあった詩句を思い起こす。煎じ茶は、「悪の華」に一回しかでてこないが、例えば媚薬の最も積極的な効能は、「美への讃歌」で、此の世の醜さと、生の刻刻の重みを減じてくれるものとなる。またワインは、「毒」の中で、あばら屋をも奇跡的な豪華さにみせてくれる。同じ詩で、阿片は、無限をひろげ、時を深め、官能をうがち、感受を高める。つまりこれらは、魔術的に美の感覚を深めるこ

とで、この世の愁いを忘れさせるのだ。天国を一撃で地上にひきずり落とすことを唱えるボードレールにとって、これは重要な手段である。しかし、生と記憶に関わるこれらは、最終的な解決策にならないのではないか。これらにまして優れたものがある、と詩人はいう。

このどれもかなわない、君の眼、その緑の眼から
　　流れでる毒
湖にぼくの魂はふるえ、逆さまに映る…
　　夢想は群れよせ
この苦い淵で渇きを癒す

このどれもかなわない、君の
　　噛む唾の恐ろしい驚異
忘却のなかにぼくの魂を悔いもなく沈め
　　めまいを運びながら
くらくらする魂を死の岸辺へころがしてゆく

むろん、内容的に、ルネッサンス詩の影響は紛れなく、毒や死は、地上の快楽に死に天国的悦楽に甦るという、新プラトン主義の原理や、死ぬほど恋焦がれている、という含意をもち、軽々しく、殺人の毒や死体となる死に結び付けるのを、禁ずるものがある。しかしながら、泥から黄金を造り、時のアレゴリーである空間をふかめたりする、ボードレール美学の根本原理をさしおいて、登場する、毒による夢想と、死と忘却の暗い魅惑は、恋愛詩の修辞をこえた、より形而上的意味を、我々に告げてはいないだろうか。彼は、悔いと、それにまつわる恥や苦悩を、自らの死と忘却のうちに、亡ぼすことを恋い願うのだ。

悔いを絞殺するために、これは最終的で決定的な方法に思われる。だが、本当にそうだろうか。少なくとも、忘却は、またしても、挫折に終わる。というのも忘却のうちに生きつつ、憂愁をふかめる王がいるのだ。「スプリーン」に語られる、血の代わりにレテの緑の水が体内を巡る王がそれだ。また詩人が、「ぼくは月にもきらわれる墓です/悔恨みたいに蛆がながい身をひきずっていて/こよなく愛しい死体の上にいつだって襲いかかるのです」と告げる時、おそらくは死も、悔恨を免れてはいないのだろう。

それなら、愛はどうか。幸福な愛は存在しないのか。ボードレールは分析するだろう。愛の行為は、泌尿器官でなされると。そして彼にとって甘美な愛があるとするなら、それは、悔恨にさいなまれつつ優しい落日をみるような、そういう愛なのだ。悔恨のない愛とは、逆説的に、次のようなものとなるだろう。

戦士ふたり追懸け追攻め　その武具
閃き　血をはね　あたりの空気をけむらせた
この競争　かちかち鉄の鳴りあう音は　おぎゃぁおぎゃぁ
泣きやまぬ恋愛に俘のろうがわしい若さ

刀は折れた！　ぼくらの若さみたいに
恋人よ！　けれど歯に鋭い爪が
時をあけず　あてにならぬ剣や太刀の仇をとる
愛に手負いのねびた心の凄まじさ

山猫や豹の出没する谷を
ぼくらの勇士は意地悪くむずと組んで転落した
ひからびた茨はかれらの皮膚で花咲くだろう

――この谷底　それは地獄　ぼくらの友人で一杯だ
悔いもなく転びこもう　ひとでなしの女戦士よ
ぼくらの悪みあう烈しさを久遠のものとするために
（決闘）

だが「悪の華」の中で、詩人は憎々しく呪われこそすれ、憎悪による幸福を歌うことはなかったのだ。

4

こうして、悔いを絞殺する試みは、全て失敗に帰した。だが恐らく、死にだけは、特別な位置を与えねばなるまい。墓の中で死体は悔恨のような蛆に食われる。では、骨になったらどうか。悔恨のとりつくしまもあるまい。だが、「耕す骸骨」において骨も苦役を強いられるのだ。とはいえ、肉体を去った魂には、救いがあるかも知れないではないか。ボードレールはその魅惑に、ほとんど死の淵のほとりまではゆく。「毒」においてもそうだったし、「虚無の味」でも、「雪崩よ、おまえの落下に私を連れ込んでくれぬか」と呼びかける。しかし、港に停泊する船を、幸福への旅だちを夢想しているとして愛する詩人は、そのこと自体を愛したのであって、「悪の華」は死をともなう出発の瞬間で終わる。「天国？地獄？それがどうした」と歌う詩人に、後悔はあるまい。だがそれは、この地上で達成される幸福を意味しない。彼は苦痛なく死ぬことを、人生上でも、もはや実行しなかった。彼は、天命を待ったのである。[7]

その間、彼は、≪自分の≫美に定義を下した。「それは、どこか熱烈で悲しく、幾分

漠然としたところがあり(…)神秘と哀惜も、美の特徴である」そしてこう書くのだった。「こう考えてもいいのだ、彼ら(二人の恋人)にとって、愁いと思いやりのこの夜ほど、優しい官能はなかった――苦悩と悔恨に満ち満ちた官能」[8]。

ボードレールの魂は、悔恨に満ちていた。また彼はそれを愛したのだった。だが、彼が重要な詩人であるのは、悔恨を亡殺するために、言語の魔術を使い、失敗したということなのだ。彼は、負けるために賭けたのである。悔恨は傷を開く。そしてそれが彼の成功だった。「苦悩を慰めるのは苦悩だ」と彼は書く。彼の求めた癒しとは、傷を閉ざすことではなかった。永遠にぱっくりあいた傷をつくり、それを耳とし、そこから聞こえるもの、そこからしか聞こえないものを、美の旋律として、詩の中にもちこんだのだ。それが彼の癒しだった。それが、詩を書くということだった。

注

悔恨を扱った本論考に、それを主題とする作品「沈思」を扱わなかった。これは、「哀惜」との関係を展開せねばならず、ページ数の制約上不可能だったからである。次の機会に、それを考察する予定である。また、「ある聖母に」という作品にも、悔恨の主題は重要に作用するが、そのためには、Mal du siècle との関係で、悔恨の派生源を検討せねばならず、そのことは、本稿の射程に入っていないので、あわせて取扱を割愛した。なお、訳は全て拙訳によった。また、ボードレールの作品は、全て、プレイヤード版によるので、以下 Pl. と略す。

(1) Claude Pichois et Jean Ziegler, *Baudelaire*, Juliard, 1987, pp.207-208.

(2) Pl.*Correspondance* I, Gallimard, 1973, pp.124-125.

(3) remord(s) という単語は、禁断詩篇を含む「悪の華」に、22回(20篇)登場する。(*A concordance to Baudelaire's Les Fleurs du Mal*, edited by Robert T.Cargo, The University of North Carolina Press, 1965.) このうち脚韻に使われるのが、10回。そのうち、corps と韻を踏むのが、1回。あとは全て、mort(s) と韻を踏む。また、韻に使われた語のうち、sans remord(s) という形で7回使われる。即ち、脚韻に使われたもののうち、7割が、sans remord(s) − mort(s) の韻である。また、mort(s) と韻を踏むのは、remord(s)-9、forts-2、dort-1、efforts-1 の回数である。このことは、珍しいとも平凡ともいえる。ゴーチエは、全詩作中、1回しか、mort-remord の韻を使っていないようだ。(*Poésies complètes de Théophile Gautier*, tomes1-3, publiées par René Jasinski, Nizet, 1970.) 彼には、mort-corps の韻が比較的多い。サント-ブーヴは *Joseph Delorme* の中で、2回しか使っていない。(Edition d'aujourd'hui, 1829.) ラマルチーヌは、後期に何度か使うようになった

が、mort-sortの韻が多いようだ。しかし、ユーゴーは多用しており、1856年刊の「瞑想詩集」までに、少なくとも26回 remords-mort の韻がある。「オード・バラード集」に、約半数の12回使われ、そのうち sans remords-mort は4回である。それ故、ボードレールに見られる韻は、一般的ではないにしても、形式上、独創的ではない。個々の詩人の悔恨については、論題も大きすぎるし、ここでは扱わない。

(4) Victor Hugo, L'Âme dans *Odes et Ballades.*

(5) Pl. *ibid.,* p.193.

(6) Robert Vivier が、*L'originalité de Baudelaire*, Bruxelles, Palais de l'Académie, 1965. の中で、死の主題についての詳細な論考を施している。それによれば、ボードレールにとって、死は、暗い休息の欲望－死についての懐疑－地獄の恐怖－心理的渇望の目的としての死、として、展開する。本論考も、これを参考にした。

(7) 「悲しみさまよう女」における

——時々、アガトの悲しい心は
いうってほんとだろうか：悔いや罪や悩みから遠く
連れてって、客車！さらって、快速帆船！

という詩句は、こうしたボードレールの心境を正確に反映していよう。

(8) Pl. *Œuvres complètes* I,1975, p.657, p.664.